

現代イランの食生活の変化 -動物性タンパク源と米食の事例から-

中濱 基博

まずは、現代のイランの食生活がいかなるものかについて、食生活をどう捉えるかというモデルを用いた。食生活は社会、経済、文化の要素も加味されて、複雑にからみ合いながら、その行為を遂行する。なかでも経済的要素は価格や所得などの変化を通して、短期的に「食」の量的部分の増減に影響を与え、長期的には種類や質的部分を変化させるものであるとする。

また、食材の種類は、生活者を取り巻く社会的要素だけに主導されることはなく、生産を取り巻く自然環境や経済的要素によっても制約を受けて、自然環境は歴史的には生活環境と同義で、文化的要素を形成した大きな要因であり、さらにコストと質の両面からの食材供給の規定要因となっている。

栄養所要量が満たされる以前の段階では、食料経済だけではなく経済活動全体が、必要な食料を確保することを第1目的に運営される。だが、人間の消化能力の限界から、一定の所まで来ると一人当たり食料消費の量的な増加は停止する。栄養所要量が満たされたところから、一人当たり食料消費の増加が止まるところを特定する。イランにおいては1990年初頭まで、そのカロリー摂取状況は成長期であり、その後のカロリー推移はわずかな増減を繰り返しながら、ほぼ横ばいになり、飽食段階を迎え成熟期の入口に立ったといえる。飢餓からの解放は明確である。

次に、所得と食生活の関係から、所得弾力性に注目した。都市部においては1996-2001のデータからやや鈍化がみられ、このままの推移を維持すれば食生活の完全な成熟としての指標となろう。逆に農村部ではいまだ所得の影響力は大きい。さらに、肉類の推移は都市部・農村部ともに高くはないものの、鶏肉と魚・エビの推移は赤肉に対して高いままである。今後も経済発展が継続し、所得が増加しつづければ、これらすべての動物性タンパク源の消費も大きく増加すると予想され、多品目化はますます進むであろう。とはいうものの、総タンパク源における植物性タンパク源の割合がまだまだ多く、動物性タンパク源がとってかわるにはほど遠い現状がある。

また、所得格差は都市部と農村部で起こるよりも、都市内部で広がりを見せ、低所得者層のエンゲル係数は35%を越えてなお伸びる傾向にある。一方で、2002年には高所得者層は15%を切っている。都市肥大化は所得格差発生に加え、食料供給と需要に大きな影響を与える。都市での所得水準が上昇すると、人々の消費量は多くなり、多種多様な食料が必要となる。しかし、都市での所得格差が広がることにより、貧しい都市住民は、通常、必要量と好みを満たすだけの食料を購入することが困難になる。そして都市に入ってくる食料は、必ずしも消費者の手に届くわけではなく、農場、輸送及び流通でのロスに、腐敗による

ロスが加わり、供給不安がつきまとう。この問題は農村部よりも都市部で多く発生し、輸送手段が不備で、衛生状態が悪く、住居の密集により食材が汚染すること、また農村住民に比べて外から買ってくる食料への依存が高いことがますます問題を大きくする。

飽食段階を迎え、成熟期の入口に立ったイランの食の現状において、動物性タンパク源、特に肉類と水産物に関して、新たな選択肢として鶏肉や魚などの消費増加が見受けられる。選択肢が増えることで多様化していくことも予想されるものの、現状の一人当たりの一日におけるタンパク質量推移も、多様化というよりも鶏肉だけの急激な増加で肉類・水産物のタンパク質摂取を牽引している。多様化へと移行する前段階として、食材の種類が増えている状況といえよう。1990年代に入り、鶏肉の飛躍的な伸びは、肉食機会が少なかったイランにおいて、肉食機会を得ることができるようになったといえよう（1986年と2001年の数値を比べると倍増している）。

このタンパク源の安定的なルートづくりは極めて政治的判断によるところが大きい。都市化による人口急増、それにともなう食料需要増加という社会問題に対して、積極的に開発を推し進め、赤肉タンパク源の不足から動物性タンパク源自体の不足に陥る前段階で防御し、鶏肉生産に力を入れてきた結果、今日の鶏肉消費向上へと繋がっている。人口増加率は鈍化したとはいえ、現在もなお、国民は増え続け、都市化問題を内包しているイラン社会において、手近に増産可能な鶏肉生産は継続して向上をみせて、消費に影響を与え続けている。

詳しく鶏肉の生産面をみるに、人口を多く抱える州ほど、飼育数も多く、イラン全土で鶏肉の需要と供給は高バランスをとっており、

どこであろうと鶏肉を消費できる環境があるといえる。生活者を取り巻く社会的要素または問題にだけ主導されることはなく、生産環境によっても上手く食生活を支えている事例である。

さらに自然環境を食生活に結びつけるべく、政府も新たなタンパク源として水産品に目をつけている。国土の南北にあるペルシア湾、オマーン海、カスピ海の水産資源開発を積極的におこないはじめた。これは直接消費の機会増加と、飼料用としての魚粉も視野に入れた開発であることは注目すべきである。過疎地帯での漁業の振興も失業問題に一石を投じた。

とはいうものの、問題点もいくらか見受けられる。鯨肉消費の奨励など、長らく宗教的にグレーゾーンだった食材までも消費者に勧めたところで、おいそれと手が伸びるはずもない。文化的に培われた食生活（ここでは食べないという食生活）は簡単に翻ることはない。また、さらなる消費拡大を狙うのであれば、積極的にコールドチェーンの全国的な確立をおこなう必要がある。現状は缶詰等の鮮魚ではない魚の流通も活発であるが、産地が国土の南北にしかないことから、消費地や中継地での冷凍・冷蔵設備や、冷凍冷蔵運搬車の整備が急がれる。

また、経済成長とともに米食が広がり、その消費が増大している。ではその生産はというと、ギーラーン州とマーザンダラーン州の2州で全体の7割を占める。しかし、自給化することはできず、さらに干ばつの影響から、安定した生産もままならない。そのため輸入に頼らざるを得ない現状である。イランの米食はアラブ地域のように安価な代用物を利用することなく、パキスタンのように価格も安くはない。それでも米食消費は拡大して

いることは、何に起因するののかということで、米の生産の発展と消費をからめた考察をおこなった。

1860年代後半から70年代にかけて、ギーラーン地方において、微粒子病の蔓延と生糸価格の下落により養蚕業は深刻な影響を受けた。農民により作付転換が進められた。代替作物としてギーラーンの農家条件に適し価格の面で有利性をもっていたのは米である。

また1869~72年にイラン東部・中部・南部で大飢饉が発生した。これによって米価上昇を受けて開墾熱を高まり、水田造成がされた。飢饉の消息とともに米価は元の水準まで戻ったことに注意する。

1880年代から20世紀初頭にかけては、ロシアとの関係が大きくなり、特に1879年のバクーにおける石油開発成功が、イランからもその労働力を吸収し、米の需要を増加させた。国内需要以外の新規市場開拓をもたらした。1892/93年の輸出額は23.4万ポンドで、これは70年代のはば10倍である。さらに1904~08年には50万ポンドにまで達する。この額は1879年におけるギーラーンの米の総生産額に匹敵する。背景として資本主義の発展にともなうロシアの産業地域構造の変化がイランへ輸出の契機をもたらした。米供給地としてカスピ海沿岸のイランが確立された。この時期から水田造成で米を栽培しはじめたことで、米食機会も増えた。

20世紀前半以降については、粳米生産高は、1920年代平均で27万t、1955年には32万t (12万2,500ha)、1960年には38万t (17万5,211ha) になり、20世紀初頭と比べ2倍以上の伸びを示している。1960年代は技術的な改良がなされ、第二の稲作発展期と呼べる時期であった。そして1963年にはセフィードルード川上流のマンジールにダムが完成し、デルタ流域外へ

も用水路が張り巡らされ、安定した米生産が可能になり、消費水量が多く旱魃に弱い収益性の高い中・長粒米の生産が大幅に増えた。従来主に栽培されていた短粒米は自家消費用に、中・長粒米は販売用に向けられ、徐々に後者の栽培比率が高まった。また、農業の機械化や農業技術指導も進み、単位面積あたりの流量も増加した。

1960年代の発展を受けて1970年代以降は、イランの米消費は一大転機を迎える。1956年から輸出量は急激に落ち込み、1972年には輸出が完全に途絶えた。逆に輸入量は1970年頃から増加し、以降は上昇し続けることとなる。生産量が減ったのではなく、国内消費量が増加した。20世紀半ばまで乾燥地域では米が庶民の常食になることはほとんどなく、チェロウやポロウを日常食べる人は富裕層に限られていたが、米料理が乾燥地域都市部の日常に広まり、特に都市中産階級の米消費が増大した。高い経済成長下で生活水準が向上し、米が豊かな生活の象徴となったことがこの変化の一因にある。乾燥地域で食べられるチェロウやポロウには一般に長粒米が好まれた。また同時に炊飯器が普及したことにより、キャテが乾燥地域の電気の通る都市部で食べられるようになる。1970年代は高度経済成長のもとで国民生活が急変し、様々な問題が社会に現れた時期であった。そして、1979年にイラン・イスラーム革命が起こった。ナーンが低価格で提供され、米は相対的に高価となった。それゆえ、富裕層や中産階層が米を多く食べ、貧困層がナーンを多く食べるという傾向がこの時期の特徴である。

イラン・イスラーム革命後においては、イラン・イラク戦争の影響で停滞したが、イラン国内の米需要が減ることはなく、むしろ人口増加により需要も増加した。米価高騰と

単位収量の増加というプラスの要因はあるが、急激な人口増加が農家の富裕化を妨げており、結果的にギーラーン地方の稲作社会は、革命以降は経済的に伸び悩んでいるという。

以上のように、1970年代を契機に一気に一般化され、消費も拡大した米食であるが、その中心品種はサドリー (sadri) に代表される長粒種である。その味の良さとアーブケシュ (âbkesh 湯取り法) に最適であることから、高価であるが拡大した。その後、政府も需要に応えるべく、国内増産に励む。高収量品種を普及して生産量向上を目指すも、その味の悪さから、市場での評価は低い。さらに国内増産でも足りない分を輸入に頼るのだが、タイ・ヴェトナムから安価に仕入れた米の味は長粒種の味を覚えた国民には受け入れられず、市場でだぶついている。

先に述べたように、食の種類や質的部分を示している。米の消費局面においては、量を満たすことよりも、その味、香りといった質に重きが置かれている。

以上のように、現状のイランの食生活は、1990年初頭まで、そのカロリー摂取状況は成長期であり、その後のカロリー推移はわずかな増減を繰り返しながら、ほぼ横ばいになり、飽食段階を迎えたといえる。そしてその食生活は経済的、社会的、文化的影響を受けながら、成熟しようとしている。だが、経済的な格差と人口増、都市化という問題を抱えているイランにおいては、全国民の食生活が同様に成熟へは向かうことができない状況もある。とはいえ、成熟へと進み始めようとする食生活において、鶏肉や水産物の消費が政治的な社会の変化により高まっていることは、それ自体、食の多様化への準備段階であるといえる。さらに今後は動物性タンパク源の高級化と流れも考えられ、赤肉需要が高まる可能性

も高い。これに関しては、今回言及するに至らず、今後の課題とする。また、米食に関しては、長粒種によるアーブケシュという食文化が確立されており、すでに高級化へと進んでいる。それはたとえ政治的な社会の影響を受け、量的供給は進むものの、変化することはない。